

長野県革新懇ニュース

2017年9月号
発行日9月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 0510-3-15971

219

発行 日本と信州の明日をひらく 県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 ====

- 1面 柳沢京子さんインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 佐久で29回平和のための戦争展
見聞きジャンボ意見広告
- 4面 随筆「女たち男たち」堀井正子さん
憲法9条の記念碑がある「朧月夜」の寺
読者のこえ、クロスワードパズル

長野県革新懇

検索



きりえアーティスト。信州大学教育学部美術学科卒業。1977年「一茶かるた」刊行。以来、独自のきりえ創作で、日本はもとより、ドイツ各地、ニューヨークなどで個展多数。長野県を本来の美しい風土にしたい、と情熱を燃やし続ける。塩尻市奈良井宿のことから永年、観光大使を続け、長野市「灯明まつり」に参画するなど、興す活動は、きりえ創りにも通ずる潔さがある。長野市在住。

子どもたちの目が輝く

「きりえ」の世界

柳沢京子さん

(きりえ作家)

切り絵はシルエツト
印象度が格段に高い

Q 「切り絵の世界」という、当時としては先駆的な世界に入られたきっかけをお聞かせ下さい

信大の教育学部時代に「デザイン研究会」に参加し、丁度その頃、「デザイン県展」が始まったんです。そこに何か作品を出そうということになって、私はB1版のポスターをつくることにしました。図案は自由なので、題材に信越放送を選び、4枚のシリーズに野菜とかお魚とかお料理の絵を描いて、こんな番組がありますというポスターをつくらせました。それがなにかの賞をもらったんです。それが信越放送から見えた方の目に留まって「あなたの仕事をみた。アルバイトに来て欲しい」と頼まれました。こ

ちらもアルバイトの仕事が欲しい時代でしたから、早速行くことにしました。仕事は番組宣伝用の新聞広告でした。もちろん訳も判らずでしたが、私に指示を出すチーフは「週刊女性」の編集部にいた方です。だから、単語の使い方からあらゆることを教わりながら、新聞広告の制作を始めました。その頃の番組宣伝の広告は、どこかのご祭礼とかの特別番組みたいなものを扱うわけですから、写真も地味で、目立つ素材ではなかった。それで写真の代わりに木版を買ってきて始めたんですが、彫って、刷って、キャッチフレーズなどコピーも自分で書くものですから時間がかかるんです。2日位の間は版画まで彫るのはすごく大変でした。でも写真よりはすごく目立つんですね。

丁度その頃、会社にコピー機が入り、コピーを1枚とすると、真っ黒い紙が1枚残るんです。もったいないと思って、それをもらって、出始めたばかりのカッターで切ってみてみたら、それなら、版画より楽ですよ。それで、野菜や楽器、蘇民将来符とか、飛騨から渡ってくる鯛などを切ってみますと、とっても面白いんですよ。しかも新聞広告に使ったら、よく目立つんです。こりゃあいいということ。で、どんどん黒い紙を切ることに始まりました。仕事は新聞広告に止まらず、ポスターの依頼もくるようになり、それから買ってきてくれるようになります。黒い紙を紙屋さんに買ってきてくれるようになります。本格的に私の得意技になっていきました。

新聞広告をなんとか目立たせたいという課題の解決策が、黒い紙とカッターだったんです。それをどんどんすすめていくと、描いた絵より切った絵の方が、表現にマッチしたわけですね。その後、奈良井宿のポスターを手がけましたが、それが黒い紙でつくる絵にピッタリでした。そして、戸狩や望月などのポスターの仕事が続きました。あの頃「デイスカパージャパン」で、上野駅や東京駅にもポスターが掲示されたんですが、翌日には盗まれるということなどもありました。そんな経過ですが、「切り絵」のもとあつたように思っています。

300円のカッターが
もっとも手になじむ

Q 切り絵は細やかさと迫力を感じるのですが、どうやってつくるのでしょうか？

今は黒い紙は全部渋紙という日本の伝統の紙を使っています。渋紙の裏の茶色の面に筆でデッサンをしてカッターで切っていく、切りながら絵が決まっていくという感じですね。木版画よりも楽に切れるのです。そのカッターは、今でも私の手になじむ300円のカッターじゃないと駄目なんです。

Q 今までの出会い、その思いをお聞かせください。

常にかげがえのない人との出会いがありました。朝日新聞の長野支局にいて、親しくしていた方が千葉京葉の支局長になり、船橋西武美術館で

多くの国産品の中で
育ててもらった

【2面に続く】